

【銅賞】

『米農家の問題をぼくが解決するかも』

宮崎市立小松台小学校 6年 松田 啓介

ぼくの祖母は、畑で野菜を作るときをしゆ味としています。畑から帰ってきたら、「ふう、つかれた。」

と言いつつも汗だくになっています。しゆ味でやっていてもこれほどつかれるのなら、米農家の方はどれほど大変なのかを考えてみました。

ぼくは数年前に稲かりの体験をさせていただいたことがあります。そのときに教えていただいた米農家の方は、全てを手作業で稲をかっていて、機械をいっさい使っていませんでした。稲かり体験のときは約半日も作業していましたが、稲をかり終えることはできませんでした。そのときは、「稲かりとはこれほど大変なことなのか」というぐらいにしか思っていませんでした。

それからしばらくして、社会科で稲作の問題点について学習しました。その問題点を大きく分けると三つあり、消費よりも生産量が増えてしまう「米あまり」ということ、「コンバインやトラクターなどの機械が高価」ということ、そして「米農家のあとつぎが少ない」という問題でした。それぞれの問題について原因を調べてみると、結局は「稲作は収入が不安定である」ということが共通していました。

一つ目の「米あまり」問題は、そもそも日本人が米を食べなくなってきたことや、減反政策や輸入米の問題などもあって、米があまっているから収入が不安定になるようです。

二つ目の「機械が高価」問題は、稲作をするための機械が高すぎて小さい米農家では買えません。しかも高いのに壊れやすいということです。だからいつまでたっても作業が大変で、収入が不安定になってしまうようです。

三つ目の「あとつぎが少ない」問題は、農家の数が減っているだけではなく高齢化が進んでいて、さらに収入が不安定なのでなりたいたい人が少ないのが原因のようです。

それらの問題を解決することはできないのでしょうか。ぼくの得意なことはプログラミングです。将来はプログラミングをもっと学んで、AIと呼ばれている人工知能を開発して社会に役立てたいと思っています。昔とは違って今はいろいろな仕事でAIが使われています。もちろん稲作でもすでにドローンなどと組み合わせてAIが使われています。これからは「どうすれば稲作にAIが役立つか」ということも考えながらプログラミングを学んでいきたいと思っています。

こうして米農家の方々はいろいろな問題を抱えながらも一生けん命お米を作っています。今はお米を食べることでしか応援できません。しかし未来のぼくがAIを開発して稲作の問題を解決するはずなので、米農家の皆様しばらくお待ちください。